

生きるとは、善くありたいと思うこと

ぬがー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バーテックスとセブテントリオン、天の神とポラ里斯って見た目似てるよね。

目

次

プロローグ①
プロローグ②
プロローグ③

第一の侵略者
ドウベ①
ドウベ②
ドウベ③

23 19 15 11 7 1

プロローグ①

景山一哉は腕を縛られ、両親と共に神社へと歩かされていた。

頬は殴られて腫れ、全身に痣ができるおりずきずきと痛む。それでも一哉は軽傷な方で、子と妻を庇っていた父は頭から血を流し、腕はおかしな方向に曲がっていた。

歩みを止めれば周囲で監視している村の大人たちに棒で殴られるため、一家は痛みをこらえて歩き続ける。

「……なんでこんなことになつたんだろう？」

二〇一五年七月三〇日。

世界中を大きな地震が襲うと共に、空から後に『星屑』と名付けられる異形の怪物たちが降ってきた。

星屑たちは不思議な力で守られており、通常の兵器やシエルターでは傷つけることも、侵攻を防ぐことも叶わなかつた。武装していようが無防備な一般人と同様に、ただ殺され食されていくのみだつた。

人間の世界はあつという間に星屑たちに食い荒らされ、そのまま滅ぶかに思われた。だが絶望するにはまだ早かつた。

人の味方をしてくれる神々や、古くから超常の力を引き継ぐ一族などが星屑の侵攻を阻む結界を張り、人類の生存圏を確保した。

特に四国においては『大社』が人間を守ってくれる神々の集合体である『神樹』の力を借り、樹木でできた壁のような大規模結界で四国全域を包み安全地帯と化した。それにより一先ず四国は脅威から逃れることが出来たのだ。

とは言えただ結界内に籠り、守られているだけではいずれ結界も破られ滅ぼされる。

次なる脅威に備えるため、大社は神の声を聞くことのできる『巫女』の助言を頼りに希望を探した。

その希望の一人が高知県の田舎の村にもいた。

名前は郡千景。

当時小学六年生の少女である。

村人たちはなぜ彼女が希望となり得るのかわからなかつたが、何でも神から巫女にそういうお告げがあつたらしい。今や四国の統治組織となつた大社の人間がへりくだつて話し、恭しく本拠地のある香川県へと連れて行つていたのだから嘘ではないのだろう。

これを聞いて村人たちは焦つた。

なぜか？ それは彼女の一家——と言うより彼女を村ぐるみで迫害していたからだ。

きつかけは母親の不倫だが、千景自身に問題はない。単に「元々はよそ者で、殴つても問題にならないから」である。

母親は不倫相手の男と村から出て行き、父親も子供に興味がない。親の不倫という醜聞もあり、攻撃する理由も作れた。

だから村中の人が寄つてたかつて苛めて遊んだのだ。

大人たちは千景を蔑み、傷つけ、本人的には些細な嫌がらせをして楽しんだ。

子供たちはそんな大人たちを見て育ち、千景を「阿婆擦れの子」「淫乱女」と呼んだ。毎日のように物を盗つた。來ていた服を脱がさせて、焼却炉で燃やした。ハサミで髪を切り、一緒に耳まで切れて泣く千景を笑つた。階段から突き落としてみた。

皆で一致団結し、悪者を攻撃するのは楽しかつた。自分は『善』側で、正しいことをやつてゐるんだと思えて安心できる日々だつた。

そんなことをやつていたのに、唐突に「郡千景は神から人類の希望として選ばれた」である。寝耳に水どころの話ではない。

神が守つてくれているから自分たちは星屑に食われずに済んでいいるし、神が施してくれるから四国内だけでは生産できない食料品等も変わらず手に入れることが出来てゐる。だといふのにこんなことがバレては自分たちは切り捨てられることになるかもしけない。

村の人たちは多いに焦つた。子供たちも大人たちを見てマズイことをやつていたとようやく理解した。

村の代表者たちが会議と言う名の責任の押し付け合いを延々と続

けていくうちに、誰かがぽつりと呟いた。

「そういうえば景山の家だけあまりやつてなかつたな」

会議に参加していた面々の表情が変わる。

確かにあの一家は陰口にも加わらず、自分達に飛び火するのを恐れて助けこそしなかつたが迫害しようともしなかつた。息子の方も千景より学年が一つ下で接点が少なかつたというのもあるが、いじめには参加せず、道で通りすがつても石を投げたりしなかつた。

郡家とは違い、村の催しにはきちんと参加していたため孤立こそしていながら、少し浮いた立場にいたのは間違いない。

「なんかあいつら前から怪しかつたよな」

「もしかしてこうなること知つてたんじやないか？」

「？いや、こんなこと事前にわかるわけがないだろ？」

「神が実在したんだ。表に出てこなかつただけで昔から。ならそつちから聞いてたのかもしけん」

「でもそういう神の声が聞こえるやつって大社にスカウトされてるんじゃなかつたか？」

「……大社がスカウトしてるのって、人間の味方の神さまの声が聞こえる奴だよな？　じゃあ人間の敵の神の声聞いたとか？」

「ツ！　それだつ！　そうに違ひないつ！　それで俺たちにあの子を虐めさせて、自分の評価だけ上げて取り入る氣なんだ！」

「内部崩壊狙いか？　ありそうだな。そんなのでもなければ私たちが神様に選ばれるような子を虐めるはずがない」

会議の結論が急速にまとまっていく。

元々全員が「自分は悪くない」という結論ありきで話をしていたのだ。諸悪スケープゴートの根源が見つかれば、答えが出るのは早かつた。

「となるといつまでも人類の裏切り者を放置しておくわけにはいかないよな？」

「ああ、気付いたからにはきちんと倒して、神様に俺らは間違いを正せたつて理解してもらわねーと」

「じゃ逃げられる前に景山のとこの一家捕まえないとな。始末はどこでする？」

「神社でいいんじゃないか？ 神様は神樹になつたって言うけど、分靈とかあるらしいしたぶん通じるだろ」

自分たちが悪になり、神から見捨てられることに怯えた者達の行動は早かつた。

人手と武器を集め、気付かれるような暇も与えず景山家に乗り込んでいった。

そして舞台は冒頭に戻る。

「祭神様、人類の裏切り者を連れてきました。これより処断いたしますので、お納めください」

訳も分からぬまま神社に連れてこられた景山一家の内、父親だけが前に出させられる。使えそうな道具が一つしかなかったためだ。

「オラアッ！」

「ぎ、ぎやああああああああああアッ????!!」

力一杯振り下ろした斧が、狙いから外れて肩に当たる。

殴られ憔悴し、状況を理解することも出来ていなかつた父があまりの痛みに叫びをあげ、母も正気を取り戻し子供を逃がそうと暴れ始める。

それでも数にはかなわず、村人に取り押さえられた。

「動くなクソが！ お前も外してんじゃねえよッ！ その大きさの一個しかなかつたんだぞ！」

「悪い、力み過ぎた。でもこれ一回で落とすの無理だぞ」

何度も斧が父の首に振り下ろされる。

それを一哉は理解することを放棄し茫然と眺めながら、この場にいる誰にも聞こえない超常の存在の声を聞いていた。

『もうこの社には神はいないってのによくやる。時代が変わつてもこの村の住人は変わらないな』

「（……だ、れ？）」

『僕たちは昔からいる悪霊さ。家主がいなくなつて自由に動けるよう

になつたんだ。

それより君に話がある』

ついに父の首が切り落とされ、神社の中へと運ばれる。

また母も前に出させられた。子供だけは助けてくれと叫び続けるが、斧が叩き込まれ絶命する。それでも首を一つ落として切れ味が落ちた斧では切り離すのに時間がかかり、子供の処断が少しだけ遠ざかつた。

『君も僕たちだ。彼らの善性を証明するために悪だつてことにされ殺される生贊だ。

なら望み通り成つてあげよう、殺せれば善だと言えるような本物の悪に。

彼らが本当に善であるなら殺せるはずさ、試してみよう』

ついに母の首も切り落とし終わり、神社の中へと運ばれる。

それを見ていた一哉に抵抗する気力もすでになく、村人に前へと引っ張り出された。

『返事する気力もないか。僕たちの何人かも似たような感じだつたし、わからなくはないよ。

まあ返事なしは了承つてことにしておこう。このままだと殺されるだけだし、新入りは協力してくれるようだからね』

神社から生首が二つ飛び出してくる。

生首は一哉の両肩に収まるごと、真っ黒な靄のようなものを放ち一哉を包み込んでいく。

「な、なんだ!? 何が起きてるんだつ!?

靄に驚き村人たちが距離を取る。

ようやく靄が晴れた時、そこには三面六臂の巨大な鬼がいた。

「ば、化け物だ!!

「やつぱり敵だつたんだ!」

あまりの威容に村人たちは腰が引けて攻撃することが出来ない。

先ほどまでは斧を振り下ろすのも、棒で殴るのも躊躇なく行えていたのにだ。

鬼はそれを見て一步踏み出し、左右の首が吠えて威嚇する。悪を倒

す善を示して見せると。

『『グオオオオオオオオオオオオオツ!!!!』

「「「ひ、ひぎやああああああああああ!?!!」』

村人うち数名が逃げ出そうと背を向ける。

その瞬間、逃げた者達の首がもぎ取られた。

『一致団結し悪に立ち向かう善では無し』

もぎ取った首を握りつぶす。

空いた手に逃げられなかつた者の頭が掴まれ、同じようにもぎ取られた。

『この村では、我らのみが悪だと定義された。それを証明してみせよ』

この日、一つの村が消滅した。

プロローグ②

二〇一八年春。

大社の有する建物の一室にて、二人が向かい合つて座っていた。先に特徴的な力チューシャを身に付けた少女が口を開く。

「本日をもつてあなたの訓練はひとまず完了とします。これなら表に出しても問題ないでしよう」

彼女の名前は九頭竜天音。

大社の前身となる翔門会では巫女をしていた少女で、現在は神降ろし——日本の人間に味方する神は神樹になつてるので、惡魔憑きが近いかもしれないが——の技能を用いることで星屑と戦える人類の希望の一人だ。

「ありがとうございました、アマネさん」

答えたのは根拠もなく「悪そう」というイメージを持たれる雰囲気をした少年、景山一哉。

彼は村人を殺しつくした後、することもなく佇み続けていた。

人から外れた存在になつたせいか飲まず食わずでも空腹感があるだけで実害はなく、友人や世話になつた相手も含めた村人を殺しつくしたのに罪悪感も薄かつた。ただ望まれたことをやり切つた、という燃え尽きたような状態だった。

そのまま誰も来なければいつまでもぼうっとし続けただろう。だがそこは人類の希望を輩出した村。大社も連れて行つただけで連絡なしなんてことはせず、親には直接千景の話を伝えて安心してもらおうと考えていた。

連絡員が見たのはそちらに村人の死体が転がり、開けた場所で佇むだけの三面六臂の鬼の姿。

警戒し追加で人員を要請するも、鬼は一切の抵抗もせず拘束された。それどころか会話すら可能だつたため、戦力化が可能だろうと期待され大社で鍛えられていたのだ。

今ではただの人に擬態するのも自然と行えるようになり、暴走の心配もなさうなので戦力として活用することになつた。

「気にしないでください、こちらも必要だからしていたことですから。星屑にデビルサマナーや異能者は無力ですし、戦力は少しでも欲しいんです」

表に出ることこそなかつたが、この世界には神魔が昔からずっと存在していた。そしてそれから民を守り秘匿するための組織もまた存在していた。

そこの戦力の9割ほどが悪魔——業界用語だと神や天使なども含む——を使役するデビルサマナーだ。手軽に頭数を用意でき、召喚する仲魔——仲間の悪魔——を入れ替えることで様々な状況に対応可能。過去は貴重な技能だつたが、『悪魔召喚プログラム』の開発以降瞬く間に業界人はコレだけになつていた。習得が容易すぎ、強力過ぎたためだ。

空から星屑が降つてきた当初、彼らはどこかの神魔の仕業だと思い、悪魔を使役して民衆を守ろうとした。

だが星屑が近づくやいなや、全ての悪魔が搔き消える。

星屑は神魔の実体化を解く『悪魔強制送還能力』と言える力を全ての個体が有していたのだ。

残る1割の悪魔にも通じる異能を持つた者達も、星屑が共通して持つ人間由来の能力を完全に遮断する『人間不可侵』と言う性質のせいでの逃げるだけで精一杯だった。

これらにより靈的国防組織や民間組織、宗教組織などが抱えた戦力のほぼ全てが無力化されてしまった。残る希望は取り憑いた悪魔の力を振るえる悪魔憑きや人から外れた悪魔人間など、デビルサマナーの下位互換として業界から駆逐された者くらいだつたのだ。

「それで今後のあなたの役目ですが

「はい、なんでしょうか」

『勇者』と共に戦つてもらいます。まずは連携訓練と交流の為、彼女らが通つて いる学校に転入してもらうことになるかと」

「——

『勇者』とは簡単に言うと悪魔の力がこもつた武器に選ばれた者達だ。アマネのような悪魔憑きや一哉のような悪魔人間より暴走の危

陥性が著しく低く、悪魔召喚プログラムをモデルに作られた『勇者システム』で構築した勇者服を纏うことで高い身体能力も得られる大社の切り札である。

そして一哉の故郷から人類の希望として連れていかれた、郡千景がこの勇者の一員なのだ。

「やはり難しいですか？　どうしても無理そくなら別の手段も考えますが、できれば戦力の分散は避けたい。そこまで余裕があるわけではありませんから」

「いえ、個人的に思うことは何もないです。ただ向こうがどう思うかと、四国の皆の反応が心配で」

個人的に郡千景に対してもう思っているのは事実だ。彼女が迫害されていた時、保身を考えず助けるために動けていれば千景に恨まれることを恐れて村の連中は手出しできなかつただろう。半端な行動しかしなかつた自分が悪かつた。そこを悔やんではいるが、千景に当たつても意味はない。

だがかつて村一つを殺し尽くした日、村を離れていた千景の父も当然ながら殺している。いい親どころかかなり酷い部類だが、それでも親だ。親を奪われた彼女は純粹な被害者だし、恨まれているかもしれない。協力して戦つてもらえるか不明だ。

また勇者たちは偶然か、もしくはそういうのじやなければ武器に選ばれないのか、タイプは違うが美少女揃いだ。共に戦うアマネも美人である。戦果を挙げて情報を公開する際、民衆に受け入れられやすくなるという効果を期待できる。だがそこに明らかに危険そうな鬼を混ぜていいのか疑問だつた。

「郡さんについては問題ありません。本人に確認も取りました。ただ内心でどう思つていてるかは別なので、頑張つてください。

あと民衆受けについてですが、仮想を思い出してください。問題ありません。それにあなたの鬼としての特性は有用です。これは宣伝に活用すべきと判断しました」

「哉は「善性の集団に倒される鬼」だ。故郷の村は全滅させられたが、それは彼らが自分で思つていたような「一致団結して悪に立ち向

かえる善人の集団」ではなかつたから。もしそうだつたらあつさり討伐されただろう。

そんな鬼が四国の中の人には手出しできない、逆に外の敵はガンガン倒せるとなれば宣伝効果は大きいらしい。

「そういうものですか。

まあ郡さんが認めてくれてるなら問題ないです。指示通り学校に通わせてもらいます」

「ええ、お願いします。日程は送信されているはずなので後で確認しておいてください。学校での使う道具は部屋に届いているはずです。話は以上です。ご苦労様でした」

「わかりました。じゃあこれで失礼します」

許可も出たので部屋を出る。

これからは自由時間、部屋に戻つて日程と道具が揃つているかの確認をするとしよう。

プロローグ③

「今日は皆さんにお知らせがあります」

二〇一八年、新年度初日。

五人の『勇者』と一人の『巫女』のために丸亀城の一部を改装して用意した学校で、教師が何か重大そうな口調で告げた。

「本日よりこの学校に転入生がやつてきます。『天敵』と共に戦う仲間になるので、連携が取れるよう交友を深めて下さい」

星屑や星屑が合体した進化体はまとめて『天敵』——天から降つてきた敵、あるいは単純に人類の天敵であるため——と呼ばれている。

それらを倒せる勇者と他少数の能力者は、もう四国中から集めきっていると勇者たちは思っていた。大社が結界を張つてから一月となりうちに神からのお告げで集めきり、それ以降一人も見つかっていなかつたからだ。

そのため一人を除いて彼女らはすぐ理解できず、次いで驚愕が走つた。

「ええええええええ!? まだいたのか!? タマげたぞ!」

まず声を上げたのは土居球子。

中学二年生としては小柄だが、とても活発で目立つ少女だ。

「タ、タマつち先輩声大きいよ。」

教師からの連絡より球子の声に驚いた少女は伊予島杏。

諸事情あって球子と同一年だが一学年下の中学一年生だ。かなり大人しい性格だが、球子とは姉妹のように仲がいい。

「だが土居が騒いでしまった気持ちもよくわかる。四国で奴らと戦えるのは私たちとアマネさんしかいなかつたからな。一人増えただけでも戦力の大幅増だ」

「そうですね。送り出す側としても味方は多ければ多い程安心できます」

真面目な回答をしたのは勇者の乃木若葉と巫女の上里ひなた。

若葉は武道で育まれたピシッとした姿勢と凜とした雰囲気で、ひな

たは穏やかな声と表情、気品のある立ち振る舞いで球子と同じ学年とは思われないことが多い。

「新しい仲間かー。どんな人だろうねぐんちゃん！」

屈託のない笑顔で隣の席の少女へと話しかけたのは少女は高嶋友奈。

誰とでも仲良くなれる明るく元気な性格で、勇者たちのムードメーカーな中学二年生だ。

「……さあ、どんな相手か想像もつかないわ」

本当に困ったような顔で返事をした少女が、勇者の郡千景。ぐんちやんは郡と群を読み間違えて友奈が付けた、友奈だけが使うあだ名である。

彼女だけは今日来る増援のことを知っていた。知っていたが、どう対応すべきかも全くわからないままだったのだ。

（村の末路は聞いたけど、自業自得。神さまだつているつてわかつたのに、鬼を作るようなことしたんだから。お父さんだつて私の親つて立場を使えば止められたんだから同罪。

何よりもうそれは三年も前のこと。村を離れた後のことだし、私の中ではもう整理はついてる。

でも彼は？ 景山さんの家は完全に被害者で、私が勇者に選ばれたらせいであることになった。彼は私を恨んでいないの？」

千景は景山一家のことは覚えていた。

あの家のおじさんとおばさんは自分の悪口を言つたり差別したりしていなかつた記憶がある。それに千景が階段から突き落とされた時、救急車を呼んでくれたのが彼だつたはずだ。いじめのターゲットが移らないように犯人捜しはされなかつたが、頭を打つてぼやけた視界には映つていた。

その彼らが鬼に仕立て上げられ、虐殺を行わされることになつたのだ。きっかけとなつた千景を恨んでいてもおかしくはない。

その点に関しては全く問題ないと大社の人は言うが、千景は信用しきれずにいた。

「教室の外で待つてもらつてるので、さつそく会つてもらいます。

景山さん、入つてください

「はい、失礼します。

転入生の景山一哉、中学二年生です。よろしくお願ひします」

教室に入り、黒板に名前を書いて自己紹介を行う。おかしなことはしなかつたはずだが、全員の目が見開かれていた。

こういう時、真っ先に反応するのは球子だ。

「転入生って男だったのか!? タマはてつきり女だと思つたぞ!!」

「(……あー。アマネさんも女性だし、女だと思われてたか)」

勇者システムを運用できる資質があるのは少女のみ。悪魔憑きの資質が高いのも女性が多く、四国で実戦レベルの実力を持つているのはアマネだけだ。なら追加の戦力も女性だと勘違いしてもおかしくない。

「御覧の通り男だ。

あと勇者でも悪魔憑きでもなく、悪魔と合体した悪魔人間。経緯は特殊なので大社に申請して許可が下りてから聞いてほしい。

ただ戦闘能力については大社が保証してくれる。足を引っ張ることはないはずだ」

右腕を三本に戻しながら説明する。

球子を始め勇者たちは悪魔人間を知らなかつたが、悪魔人間化と言うのは本来利用価値のない技術だ。取り憑かせるだけじゃなく肉体まで合体させるので高度な技術が必要になり、合体した悪魔の影響が大きすぎます間違いなく暴走する。平均スペックで見れば悪魔憑きより高いが、個人差が大きすぎ誤差の範囲を出ない。産廃すぎて知らないくて当然の存在なのだ。

合体した悪魔とほぼ同じ存在のため自然と合体でき、意識にも齟齬が生じなかつた一哉が特別なのである。

「んん、少し驚いたが戦力として問題ないなら歓迎しよう。

私は乃木若葉だ。よろしく頼む」

「よろしく、乃木さん」

若葉が切り出したのをきっかけに、順番に彼女たちの自己紹介を受け挨拶をしていく。

そして最後に千景の番になつた。

「…………郡千景。よろしく」

「…………景山一哉です。よろしくお願ひします」

互いに負い目があり、他のメンバーとの挨拶に比べて気まずい。何があつたのが傍から見て推測できた。

「（下手に触れない方が良さそう、かな？　ぐんちゃんも景山くんも相手に對して何か思つてる風じやなさそうだし、自然と仲良くなれるのが一番だよね）」

「（アマネさんに二人の過去を聞いておきましょうか。何かあつた時知らないままじゃフォローもできませんし）」

こういう時、氣を回すのは友奈とひなただ。この二人がいる以上、大きな問題になることはないだろう。

二人が察したのを見て教師も胸を撫で下ろし、朝のホームルームの終わりを告げた。

「自己紹介も終わつたようなので授業を始めます。

景山君はそちらの席に座るよう」

第一の侵略者 ドウベ①

二〇一八年九月一日。

今日から新学期が始まる。

一哉たちは夏休み中でも訓練のために毎日登校していたので新学期という感覺は薄い。しかし夏休み中は自由時間が多めに取られていたし、授業もなかつた。一哉としては大社で訓練を受けていた時よりかなり緩いので不満はないが、億劫に感じる者もいるだろう。そんなことを考えながら教室の扉を開けようとした、嫌な予感がしたので少し止まつて耳を立ててみた。

「こんな悪魔のブツ今すぐ成敗だああつ!!」

「ちょ……！ タマつちさん!? 揉まないでください!!」

「むしろもぐ!!」

「ひやあああ!!」

「落ち着け土居!!」

「縦拳！ 回し蹴り！」

「あ、あんまり足を上げるとパンツが……」

察するにまた球子がひなたにセクハラして、友奈がテレビで見た格闘技か何かを千景に披露していたのだろう。

このクラスのメンバーは全員下ネタには耐性がない。小説好きでそういう描写があつても読み進められる杏が少しマシなくらいか。

勇者たちは全員ドガ付く善人だ。こういう場面を見ないようにしてヤイム直前で登校していることは理解してくれるので、被害を受けることはない。だが間違いなく気まずくなるし、友奈の方は千景が危惧した通りになつていれば泣きが入つていただろう。直前で気付けた本当に良かつた。

扉をノックして来たのを伝えてから教室に入る。

球子はひなたから離され、友奈はスカートを押さえて千景の後ろに隠れていた。

「おはよう」

「あ、ああ、おはよう。景山が来たということはもう時間か。皆席に着

こう」

皆が席に着き始め、同時にチャイムが鳴る。夏休み前と同じ生活の始まりだ。

午前中の授業が始まる。

まず行つたのは勇者や悪魔憑き、悪魔人間の重要性の再確認。自衛隊やデビルサマナーが星屑と戦つた時の映像記録を視聴した。

これまでも何度も見せられたが、やはり全く抵抗できていない。デビルサマナーや異能者は悪魔との戦いで常人を超えた身体能力を持つてゐるから逃げるくらいは出来ていたが、本当にそれだけだ。

「見ての通り既存の戦力は天敵の前では無力です。世界を守ることが出来るのはあなたたちだけ。だからこそあなたたちの力が必要なのです」

何度も聞く聞かされた言葉を繰り返し教師は伝える。この戦力に戦線から逃げられれば四国が終わる為、絶対に逃げようと思わないようにするために。

一哉としては人を助けるのは善いことだし、自分が体を張れば四国を守れるなら頑張ろうと思える。なので指示に従うつもりでいるし、念を押されるまでもない。

だがこういう風に身を削つて戦うことを強要するのは好みではない。例えデビルサマナーや異能者の家系では当たり前に行われていたことだとしてもだ。人に身を削らせる前に自分の身を削るのが正しい形だろうと思う。

「（そうするしかないって言うのは分かるんだけどな。先生だつてデビルサマナー、人に押し付けず自分で戦うつて言う正しいことをしたいだろうし。本当に嫌な世の中だ）」

教師が「なんでこの子たちだけに」と思つてくれているからこそ、勇者たちは「なんで自分たちだけが」と口にすることはない。これでうまく回つてしまふ現状に一哉は愚痴の一つも言いたい気分だった。

座学も終わり、次は戦闘訓練だ。

ひなただけは巫女としての訓練を受けるため別の場所へ連れていくれ、時々アマネさんが訓練に加わる。今日は大社の仕事があるらしく来なかつたが。

訓練内容は多岐にわたり、運動による体力向上、格闘技等の基礎訓練、座禅を組んだりして精神修養も行う。そして極めつけがコレだ。
「はああああああつ！」

『オオオオオオオツ！』

デビルサマナーである教師たちが召喚した悪魔との実戦染みた多対多の戦闘訓練。神樹の結界で星屑が四国内に侵入してくることはないせいで不足している実戦経験を積むための訓練だ。

数と大きさこそ星屑には劣るが、多様な能力に的の小ささによる回避性能を考慮すれば勇者にとつては星屑より厄介だ。これを苦も無く倒せるようになれば星屑がいくらいても作業にできるはず、という設定での訓練である。

なお一哉は敵役の悪魔をアマネが召喚する時以外は見学。悪魔人間化した経緯か、それとも村一つ滅ぼした経験か、スペックがズバ抜けているので敵を強く設定しないと人形相手に連携訓練しているの

と変わらなくなるためだ。

他のメンバーが牽制している間に前身した若葉がボス格の若葉の邪鬼オーガと切り結ぶ。体格ではオーガが見るからに優勢だが、勇者服を纏うことによって上がった若葉の身体能力はオーガのソレを上回っていた。技量もきちんとした武術の動きを取る若葉に対し、オーガは力任せに暴れるだけなので着実に追い詰めていく。

途中、大振りな【怒りの一撃】が繰り出されるも危なげなく回避しついにオーガが手に持つ鉈を弾き飛ばす。オーガは倒れるまではいかずとも体勢を崩し、胴ががら空きになつた。

「勇者、パンチ！」

「はっ！」

バランスが崩れたオーガに対し、取り巻きの闘鬼コボルトを倒し終わつた友奈と千景の攻撃が叩き込まれ、実体を保てず消え去つていく。

大物を撃破した隙を突こうと空から凶鳥イツマデと数体の妖精ピクシーが襲い掛かるも、盾と矢が飛んできて撃ち落とされていく。
「デカい鳥は落としたぞ！」

「ピクシー一体残りました！ 処理お願いします！」

「わかった！ それは私が仕留める！」

若葉が飛び上がり、ギリギリ撃墜されなかつたピクシーにどごめを刺す。これで召喚された悪魔は全て倒し終わつた。

「今回は少し強化したピクシーを混ぜたのですが、問題ありませんでしたね。

少し早いですが午前の訓練はこれまでとしましよう。お疲れ様でした」

第一の侵略者 ドウベ②

二学期が始まって数週間後。

戦闘訓練の授業中にひなたを始めとした巫女たちに神託が下りたとの連絡があり、一哉たちはアマネとひなたの待つ大社所有の建物の一室までやつてきていた。

「先ほど複数人の巫女に神託がありました。

もうじき『セブテントリオン』と呼称される強力な進化体の一体目『ドウベ』が発生。神樹の結界も越えて乗り込んで来ることです。あなたたちには私の指揮のもと、ドウベ撃退のため共に戦つてもらうことになります。

そのためこれよりドウベ襲来まで団体行動、睡眠もずらして取り、いつでも戦える態勢を維持してもらいます」

アマネから神託の内容と今後の対応について告げられる。
しばらくの間これまで通りの生活は出来なくなるが、敵には昼も夜も関係ないのだ。全員寝起きで実力を発揮できないなどといった事態を起こすわけにはいかない。全員指示を了承した。

「やることはわかつたけどもうちよつと細かい時間教えてくれたらいいのになー。そんな生活何週間も続いたらタマらんぞ？」

「神託はあいまいなイメージですが、そこまで長くはならないと思いますよ？ 具体的にどれくらいかというとわかりませんけど、体調に問題は出ない程度だと思います。

それに神樹様は神様ですから。時間の感覚が人とは違うでしょうし、かなり正確に伝えてくださっているかと」

仕方ないのはわかるが実行する労力を考えるときつい、と現場の声を球子が漏らせば、ひなたが情報を補足し神樹へのフオローも行う。「それにしてもセブテントリオンですか。名前にも意味はあるんでしょうか？」

「確か……北斗七星のことだつたかしら？ 全部で七体出てくるつてこと？」

セブテントリオンと言う名前に、読書好きで知識が豊富な杏とゲー

ムで使われていた言葉をよく覚えている千景が反応する。

アマネも神妙な表情で二人の疑問に答えた。

「意味もなく名を付けることはないと思います。ドウベも北斗七星の一つの名前ですし、七体現れるというのは間違っていないかと。

そして倒しきれば何かが起ころるでしょう。父……大社の前身である翔門会の教祖は何か知つてゐるようでした。私には伝えてもらえないませんでしたし、知る者はもう誰も残つていませんが」

翔門会幹部たちは神樹を構築する際に生贊になつて死んだらしい。噂では「彼らは神樹に混ざる形でまだ生きていて、神託で大社を操つてゐる」「勇者が美少女だけなのは彼らがロリコンだつたから」など好き放題言われている。

「そうですか。

……そういえばひなた、神託ではドウベは特別な個体だが進化体と言つていたんだろう？ なら先手を取つて進化前に倒すか、それが無理でも削ることはできないのか？」

若葉が神託の内容から対策を考えるが、それは否定された。

「それは無理です。神託だと空で発生して降つてくるイメージでしたから。結界から出ても攻撃は届かないと思います」

「……確かにそれは無理だな。空中は奴らの土俵だ」

「余計な策を用いれば不測の事態で痛手を負いかねません。敵が来てから迎え撃つのが一番でしょう。

他に質問はありませんか？

……ないようなら睡眠時間の調整を行います。まず――

数日後、深夜。

スマホから耳障りな警報音が流れ始めた。

「ようやくお出ましか。本当に何もかも止まつてゐんですね」

「そのようですね」

夜番でアマネと共に控えていたが、外の景色を眺めてみると人どころか虫や落下している葉までその場で静止しているのが見えた。

スマホを取り出し見てみれば『樹海化警報』の文字が大きく表示されている。

樹海化——それは天敵たちが結界内に侵入した際に起くる現象だ。結界が張られてから一度も侵入されたことがないので発生は今回が初である。

高位の悪魔は自分の根城にゲームのダンジョン染みた異界を形成することもあるという。樹海もその一種であり、敵と戦士を隔離して四国を守ってくれるのだとか。

アラームが鳴り終わると急激に景色が変わつていく。海の向こうから伸びた藪や根が大地を、街を、人々を覆い隠していく。

「お、おおー。すげえ。少しくらいは不具合出るかと思つてたけど、完璧に覆いつくすのか。

それに藪が上まで伸びて足場にもなりそうです。幹部の人たちここまで考えてたんですか?」

「どうでしよう。もしかすると噂されているように、今神樹の中から調整して樹海を作つたのかもしれません」

四国を覆う結界は見た目は壙のようだが、実際はドーム状に四国を包んでいる。故に結界内には天井があり、天井まで届く足場が出来たことで戦闘員を無視して神樹に向かう星屑を掃討するのがとてもやりやすくなつた。これも設計通りなら感嘆する他ない。

「それよりも、ここまで計画通りにいつて います。敵が速攻を仕掛けてくる様子はありますか?」

「俺の目には見えません。音も無しです」

「なら早く合流しましよう。スマホで確認したところ、全員無事に樹海に入れているようですし」

敵が結界を破つた直後、星屑やドウベがまっすぐに神樹に向かうようなら夜番の者が先行し足止めを行う手筈になつていた。だが敵が来ている様子はない。

結界は破られても修復するが、直りきるまでに時間がかかる。おそらくその間に戦力を整えてから攻め込んでくるつもりなのだろう。ならこちらも万全の態勢を整えて迎え撃つまで。

スマホの樹海時専用地図アプリと人を超えた鬼の目と耳で仲間を探しながら、鬼の巨躯にアマネを乗せて樹海を駆けていく。

第一の侵略者 ドウベ③

「アマネさん！ 一哉くん！ こつちこつちー!!」

合流すべく樹海を駆けていると、向こうもこちらに気づいたのか友奈が声をかけてきた。星屑たちは音や視界ではなく気配——生体マグнетライトと言う人間が生み出すエネルギーの反応——で攻撃対象を認識するため、声を抑える必要はないので結構大きな声だ。

彼らは全員勇者装束に変身しており、寝起きの体を起こすために準備体操をやっていた。予定では夜番の者が壁に向かつていれば追いかけつつ後ろから様子を窺い折を見て参戦、自分たちの方に向かつていれば合流のためその場で待機と決まつていたためだ。

「アラームで起きたら外の時間が止まっちゃって、周りはでつかい薦みたいなのがでてぐわーってなるし、びっくりしちゃいました！ 合流できてよかったです！」

「ええ、本当に無事合流できてよかったです。私たちはありませんでしたか、樹海化した際に位置がズレたりしませんでしたか？」

「ぐーんつて伸びて持ち上げられたけど、横にはズレませんでした！」

薦みたいなのもおつきいし、同じ部屋にいれば大丈夫だと思います！」

「それは良かった。なら今後もこの態勢でいけそうですね」

アマネが一哉から降りながら待機組の状況を聞き、友奈が答える。

そうしているうちに友奈の後ろをちょこちょこと追いかけていた千景が近寄り、剣を振つて体を起こしていた若葉、二人で柔軟体操をしていた球子と杏も集まってきた。

「全員、揃いましたね。

……これから私たちは第一の侵略者に挑みます。我々の手でドウベを倒し、四国を守る。これが叶えば道が開けるでしょう。ですがそのため犠牲が出せば、次の試練はさらに厳しいものになります。誰も死なず、最大の戦力を維持したまま歩み続けることが最も確実な道です。くれぐれも死なないように」

「「「「はい！」」」」

勇者5人と一哉を前に、アマネが告げる。

皆の空気が引き締まり、一哉もまた盾役の前衛として全員無事に帰さなくてはと改めて決意を固めた。

「敵の増加も無く、ゆっくりと前進中。過去の記録通りなら星屑の移動速度はもつと速い。ドウベが鈍足なのかもしれません、襲撃を警戒していると仮定して行動します。迂闊な攻撃は行わないでください。

では行動を開始します」

スマホのマップで確認した敵の数と動きからアマネが指示を出す。

指示に従い、互いにフォローが出来る距離を維持しつつ慎重に敵に迫る。

敵の群れを発見し、最初にボスを見つけたのは友奈だつた。

「あ、進化体いたよ！ お菓子みたいなやつ！ 他は星屑ばっかりだし、アレがドウベじゃないかな!?」

「お菓子みたい……いやマジでそうだな。でもどつちかつて言うとアイスじゃないか？」

球子が友奈の指さす方を見ると、本当に進化体らしき個体がいた。

カラフルなコーンの上に穴の開いた赤紫色の饅頭を乗せたような姿をしている。球子的にはアイスっぽい外見だが、あんな感じのお菓子もあつたように思う。

「……棘も牙も触角も見当たらぬわ。あの穴からは何か飛ばして来るくらいはしてきそうね。針にエネルギー弾、毒ガスもあり得るから」

「後は体当たりでしようか？ 上部と下部のどちらかが本体で、もう片方を自由に飛ばせるなら脅威だと思います」

千景と杏はドウベの外見から攻撃手段の推測を行う。

悪魔もそうだが星屑や進化体は物理法則を鼻で笑うような動きを当然のこととして行える。だがその動きは実体化した肉体に沿つたものに限定されているのだ。

棘があれば突き刺すか飛ばすかしてくるし、牙があれば噛みついてくるし、口や穴があればそこから何か出てくる。そしてなければそれ

らの行動はできないか、攻撃前に変形という隙が生じることになるだろう。それらの情報をある程度看破して戦えれば相手の隙を突き、危険を避けて立ち回ることが可能になるのだ。

そしてゲーム好きの千景と読書好きの杏はこういう予測を立てるのが上手かつた。すぐにその情報を味方と共有し、立ち回りに活かしていく。

「……ゆっくり前進しているだけで、罠を仕掛けている様子はありませんね。出来るだけ外周部で戦った方がいいですし、もう斬つても構いませんか？」

若葉はと言うと今にも斬りかかりそうな表情で、努めて自制していた。

星屑が降ってきた時から四国内にいた一哉と千景、大きな被害もなく四国まで撤退できた友奈に球子、杏とは違い、若葉は級友の多くを目の前で食い殺されている。天敵に対する怒り、憎しみは他の者達の比ではない。そしてその怒りが若葉の原動力だつた。

今すぐでも飛び出して奴らに報いを与えたい。何事にも報いを、という乃木家の家訓から外れない感情は今にも暴走しそうなほど強かつた。

それでも若葉は我慢する。自分で動くより、アマネの指示のもとで動いた方がより効率的に復讐を果たせるとこの三年で教えられたためだ。

「まだです。星屑が通常の人間狙いよりドゥベの警護を優先しています。他とは違い統率されているんです。迂闊に仕掛ければ囮まれて押し潰されるでしょう。

まずは遠距離攻撃で取り巻きを削ります。伊予島さん」

「はい！」

遠距離攻撃手段持ちの二人を中心に戦闘態勢に入る。敵が反撃に備えて一哉が一番前で攻撃を抑えられるように構え、球子と若葉は杏を、友奈と千景はアマネを狙撃から守れる位置を取つた。

伊予島が神の力の宿つたボウガン『金弓箭』を構え、アマネは自身に宿る悪魔の一体『イザ・ベル』の【灼熱の花】を具現化させた。

合団と共にマシンガンのゾー^トキ連射力で矢が放たれ、【灼熱の花】から伸びた茨が星屑を打ち据え蹴散らしていく。百体ほどいた星屑を3割程度間引いたところで、ドウベがついに動き出した。

「○Φ、%Ω、ε±▽」

上部に空いた穴から【連星の炎】が放たれる。【貪狼星の証】を有するドウベの射程距離はアマネや杏よりも長く、二人がドウベを射程に収めるより先に砲撃が飛んできた。

「フンッ！」

それを一哉が身を盾にして防ぐ。腕が焼けるも、予定通りアマネの【ディアラマ】が飛んできて完治する。ただの人間であれば痛みで苦しむし、流れた血の分だけ消耗するが、悪魔人間である一哉は魔法で回復すればそれで十分。デビルサマナーが使役する悪魔に完全にお株を奪われていたが、簡単に治せるから傷つきやすいタンクをこなせるのが悪魔人間の長所なのだ。

「ダメージはどうですか？」

「完全に治つてます。もう何発かくらつてからでも十分です」

「なら取り巻きの駆除を優先します。幸い敵の進行が遅く未だ壁近く、樹海を荒らされようと現実は海が荒れる程度で收まります。攻撃手段を確認しつつ慎重に行動してください」

まず一哉が被弾して相手の強さを測るのは訓練でもよくやる安定手。勇者たちに動搖もなく、アマネの指示のもとスムーズに星屑を駆除していく。

ドウベは【連星の炎】を収束させたり、逆に拡散させて反撃を続けるも壁役の一哉と回復役のアマネを突破できず護衛を剥がされていく。そして星屑が壁として機能しなくなる手前まで減少した時、今までとは違った行動を見せた。

「▽◇△、Θ□Ψ」

周囲に熱波を放つ度に上部が膨張していく。

あからさまな大技を打つ前兆に、勇者たちは一哉の後ろに隠れ、元々一哉の後ろにいたアマネは茨を編み周囲を覆う防壁を築いていった。

そして見た目通り膨張に限界が来ると大爆発。【連星の炎】をはるかに上回る熱波と共に弾けた上部が飛び散り周囲を打ち据える。炎に耐性のある茨もそれには耐えきれず突き破られ、一哉はボロボロになつた。

「くくくくッ！ 生きて、ますっ！」

「ならこちらですね。【ディアラハン】

その様子だと防壁がなければ厳しかつたでしようし、私や勇者には耐えられそうにはないですね」

蘇生が必要ならともかく、その程度なら具現化させる悪魔を切り替える必要もない。【ディアラマ】と同様にアマネ自身の技術であるダメージ完全回復の魔法を一哉にかけた。

火力は脅威的だが、溜めが長く一哉とアマネがいれば防ぎきれる攻撃だった。これで終わりならもう勝負はついたも同然だろう。

「今のはタマげたな！ 切り札勝手に使うか悩んだぞ！
でももう星屑残つてないし、コレは勝つたな!!」

「タマっち先輩！ そんなこと言つてると」

敵の爆発の余波で取り巻きが全滅しているのを見て球子がはしゃぐも、それを何かを察したような表情の杏が奢める。千景も杏と似たような顔をして周囲を警戒した。

すると弾けた上部の欠片がばらけて星屑になつていく。今まで観測されたことはなかつたが、セプテントリオンを含む進化体は星屑の集合体だ。ならばらけて無数の星屑に戻るというのはあり得ない話ではなかつたのだろう。

「ほらやつぱりー！」

「タマのせいじやないだろこれ!?」

「言つてる暇ないわよ！ 私たちの後ろにも破片は飛んで行つた！
そのまま神樹に向かうかもしけないわ！」

「！ そうですね、では千景さん、伊予島さん、土居さんの三人で後方の星屑の対処をお願いします！ 敵が神樹に到達するのだけは許してはいけません！」

千景の言葉を受けてアマネが指示を出す。三人はスマホで敵の出

現位置を確認しつつ即座に後方へと下がつていった。樹海内は高低差が激しく探して倒すのは面倒なので、星屑を追い越してさらに後方で待ち構えて戦うことになるだろう。

「乃木さん、高嶋さん、二人にも動いてもらいます。

減らした星屑は始めと同数程度まで補充され、上部も弾けさせれば次が出せる様子。持久戦ではいつまでかかるかわかりません。反撃を開始します」

「ようやくですね!!」

「わっかりました！」

「まずは景山さん、あなたが突っ込んで敵を引き付けてください。突破が可能なようならそのまま押し込んで構いません。状況に合わせて援護します。

二人は星屑は無視、攻撃直後の隙をついてドウベを攻撃してください。そこからの連携については訓練通りに」

「「はい！」

三人で大きく返事をして、一哉はドウベと取り巻きの方へ突っ込んでいく。

星屑は3年前の勇者服無し若葉が斬りつけても倒せる程度には脆弱。だがデカくて邪魔だし、噛みつきは一哉にもダメージが入るくらい強力だ。それが群がつてくれれば無視して突き進むわけにはいかず、足を止めて迎撃していくことになる。

そこをドウベは収束させた【連星の炎】で狙い撃つ。腕が2、3本千切れで飛んでいき、アマネの回復魔法で生やして戦闘を続行する。星屑は回復した一哉を進ませまいと、ドウベの周囲に満遍なく散開していた状態から一哉の前方に集中するようになつていった。

「私たちは無視か。いつまでも見下していられると思うな!!」

星屑の防衛が薄くなつた隙を突き、若葉の生太刀がドウベに迫る。ドウベは防ぐことも回避もせずに攻撃を受け、生太刀はドウベに接觸した瞬間物理法則を無視して停止した。

「つち、無効化されたか！　だが反射はない！　友奈!!」

「わかつた！　百回連續、勇者あ、弱パーンチ！」

若葉と入れ替わりに友奈がドウベを殴りつける。

回転数だけを重視した軽い拳では普通に硬い相手にはダメージは期待できない。だが【護りの盾】のような術や機能で無効化している場合、威力に関係なく無効化した回数だけ事前にかけた術かエネルギーがを消費していくことになる。そういう相手には有効な戦法だ。だがドウベには何の変化もない。煩わし気に体を震わせ、友奈と若葉を振り払うだけだつた。

「これ無効か吸收耐性持つてるよね？ 切り札なしじやどうしようもないよ」

「そのようだな。仕方ない、景山！ 交代だ！」

若葉と友奈が反転し、一哉に群がつていた星屑を切り崩す。

その動きを察し、アマネの茨が動きを変える。一哉の回復と補佐を長時間こなせる動きから、広範囲への火炎魔法【マハラギ】をばらまき星屑を殲滅する動きに切り替えた。

一哉は三人が作つた隙をついて一気にドウベとの距離を詰める。ドウベは先ほどと同様に【連星の炎】を放つて足止めしようと/orも、耐久力任せに突つ切り速度を落とすことはない。

「性能はいいがA-I雑だな。チユートリアルならこんなもんなんのか？」

ドウベに耐性を無視する【貫通の一撃】が叩き込まれる。

ドウベの強さは【貪狼星の証】による硬い外殻が齋す耐性にあり、許容以上のダメージを受け外殻が壊れていけば耐性が低下する。痛打を一撃入れられた時点で詰みだ。

再度自爆する前に一哉の多腕による追撃がドウベを撃破する。自発的に爆発させたわけではなかつたせいか、碎けた破片から星屑が現れるることはなかつた。

そのまま星屑の掃討戦を行い、安全第一で少々時間をかけて戦闘は終了した。